

令和 6 年 6 月 10 日現在

機関番号：34303

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2023

課題番号：18K00514

研究課題名(和文)中国壮族の掛け合い歌におけるオラリティとリテラシー

研究課題名(英文)Orality and Literacy in Reciprocal Songs of the Zhuang in China

研究代表者

手塚 恵子 (TEZUKA, KEIKO)

京都先端科学大学・人文学部・教授

研究者番号：60263183

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)： Ong(1991)によれば、識字者と非識字者では、その思考と表現のあり方が異なる。人間の思考のあり方に関してはOng説は必ずしも賛意を得ていないが、口頭構成法により作られた表現においては、後続の研究においても、リテラシーには見られないオラリティ特有の表現が見いだされ、両者の間の不可逆的な断層の存在が肯定されている。

本研究は口頭構成法以外の方法で作られた口承文芸にリテラシーと明確に分立するオラリティが存在するか、あるとすればそれはどのようなものかを、中国の壮族の口承文芸である掛け合い歌を対象にして事例研究を行い、その修辞表現の差異が伝統的な壮語の文字の識字の有無に関連していることを示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

Ong(1991)以降の諸研究においても、口頭構成法により作られた英雄叙事詩や語り物には、リテラシーには見られないオラリティ特有の表現が見いだされ、両者の間の不可逆的な断層の存在が肯定されている。一方、口頭構成法以外の方法で作られた口承文芸に関しては、それらを明確に論じた研究は見られない。

本研究では、口頭構成法以外の方法で作られた口承文芸(壮族の掛け合い歌)を研究対象とし、そこにリテラシーと明確に分立するオラリティが存在するか、あるとすればそれはどのようなものであるかを、例示したものである。オラリティ研究の対象領域を口頭構成法による表現以外に拡大したところに、学術的意義があるといえよう。

研究成果の概要(英文)： Orality and Literacy (1991) says that the ways of thinking and expression are different between literates and illiterates. Regarding the thinking of human beings, Ong's theory is not widely approved, but regarding expression created by oral composition, subsequent research also found expression that is specific to orality and is not seen in literacy, confirming that there are irreversible gaps between them.

To examine whether there is orality that is clearly different from literacy in oral literature created by means other than oral composition and what it is, if any, this research conducted case studies focusing on reciprocal songs that are oral literature of the Zhuang in China. The research showed that differences in rhetorical expression are related to the literacy of the characters of the traditional Zhuang language.

研究分野：文化人類学

キーワード：口承文芸 オラリティ リテラシー 掛け合い歌 壮族 中国 古壮字 方塊字

1. 研究開始当初の背景

口承文芸研究において、欠くことのできない先行研究として、オングの『声の文化と文字の文化』があげられる。オングは、パリ - ・ロードの口頭構成法理論(oral-formulaic theory)や認識の発達に関する A・R・ルリアの論考などに基づき、表現や思考が声にもとづいて組み立てられている世界と、それらが文字によって組み立てられている世界では、人々の思考と表現のあり方が大きく異なっていることを明らかにした。

オングの依拠した先行研究のなかで、パリ - ・ロードの口頭構成法理論は、ヨーロッパの他に、アフリカ、アジアの英雄叙事詩や語り物の事例研究でも有効であることが実証され、地域や民族の違いを超えて、世界的に通用するものと見なされている (Foley 1988)。

一方、A・R・ルリアの研究については、厳しい批判が投げかけられている。Scribner and Cole(1981) は、オラリティ (声にもとづいて組み立てられた表現や思考) とリテラシー (文字にもとづいて組み立てられた表現や思考) の対比を考察するには、ルリアの調査対象者は適切ではないとし、西アフリカの Vai の社会において、学校教育の経験者・非経験者、学校教育によらない Vai 文字の識字者・非識字者の四者を比較する形で心理学的な調査を実施し、心理学的な差異は文字の識字の有無よりも、学校教育の経験の有無に大きいことを示した。

この研究を契機として、オングの研究に対する批判的な研究が見られるようになった。Collins (1989) は、現代の教育現場の分析により、オングのいうリテラシーが、書き言葉の習得を契機にして獲得されるのではなく、学校教育によって獲得されることを実証した。また Finnegan (1986) は、無文字社会である西アフリカの Limba の社会において、フィールドワークを実施し、Limba の人々のスピーチには、オングのいうリテラシーと共通する特徴がみられることを実証し、オラリティとリテラシーは分断されるものではないと主張した。

現在では、人間の思考のあり方に関して、オングの提起したオラリティとリテラシーの間に不可逆的な断層が存在するという考えは、必ずしも賛意を得ていない。その一方で口頭構成理論の有効性は広く認められている。英雄叙事詩や語り物の表現においては、リテラシーには見られないオラリティ特有のものが見いだされ、両者の間に不可逆的な断層の存在が肯定されている。

口承文芸の全てが口頭構成法に基づいて作られているわけではない。口頭構成法によらない口承文芸においても、リテラシーと明確に分立するオラリティが存在するのか、あるとすればそれはどのようなものかを確認したいところだが、そのような研究はほとんど見られなかった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、口頭構成法以外の方法で作られた口承文芸に、リテラシーと明確に分立するオラリティが存在するか、あるとすればそれはどのようなものか、中国の壮族の口承文芸であるフォンを事例研究することによって、探究することである。

中国のタイ系の少数民族である壮族には、日本の仮名と同様な造字法を持つ漢字系文字「方塊字」があり (西田 1986) 千年以上の歴史を有している。方塊字は主として掛け合い歌の記述にのみ用いられてきた。壮族は比較的漢化の進んだ地域であって、公式の文書の記述や学校教育は漢字が用いられたが、これに参与するのは上層の階層の男性に限られていた。平均的な壮族の男性には方塊字を自学する社会的環境があり、女性にはなかった。壮族は識字環境について Scribner and Cole(1981)の求める条件を満たしているといえる。

オングを批判する Finnegan は無文字社会である Limba のスピーチと近代社会の思惟を対比させている。識字非識字による認識の差異や同一性を問うならば、Scribner and Cole の指摘するように、Limba 社会の中で識字非識字を対照させた上で、近代社会と対比させるべきであるが、無文字社会である Limba を対象とした研究では、そのような検討はできない。本研究では、壮族という同じ民族社会の中で、識字非識字を対比させようとするものである。

壮族には、男女が掛け合いのかたちでうたうフォンという歌謡様式がある。フォンは即興で作る 5 言 12 句の短詩型定型詩であり、多彩な比喻を用いながら合意形成を紡ぐことを目指して、長時間にわたってうたい交わされるダイアローグ型の口承文芸である。フォンには荒筋に沿って定型句を組み合わせながら物語を紡ぐという口頭構成法は使用されない。またフォンは、即興でフォンを掛け合うもの、口頭で伝承されてきたフォンを結集して歌本にしたもの、作者が紙にしたためた信書という形態で、壮族の社会に根付いている。

口頭構成法によらず、それとは対照的な性質を持ち、口頭、手書き本、信書の三様の形態を持つフォンを分析することによって、口頭構成法によらない口承文芸においても、リテラシーと明確に分立するオラリティが存在するのか、あるとすればそれはどのようなものかを明らかにすることが本研究の目的である。

3. 研究の方法

本研究の目的は、口頭構成法以外の方法で作られた口承文芸に、リテラシーと明確に分立するオラリティが存在するか、あるとすればそれはどのようなものかを探求することであり、そのために中国の広西壮族自治区に居住する壮族の口承文芸であるフォンを対象にして、事例研究を行う。事例研究では焦点を、武鳴県の壮族のフォンの修辞表現の相違点が方塊字の識字の有無に関連しているか」に絞り、下記の手順で研究を進めた。

(1) 収集済みの資料の整理 広西壮族自治区武鳴県他において過去に収集し、ノートに記述した (現代壮文 (アルファベット式記述) 方塊字、漢字による記述) 6000 首のフォンを、デジ

タルデータ化する。

(2)フィールドワーク 中華人民共和国広西壮族自治区武鳴県において、下記の項目について、フィールドワークを実施する。

(1)の資料に記載されたフォンのうたい手の方塊字、および漢字の識字状況について確認する。

(1)の資料から抽出した複数のフォンを武鳴県のうたい手や聴き手に示し、その出来具合を評価してもらう。

武鳴県においてこの50年間のうた上手の名前を尋ね、存命の場合は、ライフヒストリーを聞き書きすると共にうたをうたってもらい、映像資料を作成する。逝去している場合は家族からそのライフヒストリーを聞き書きし、そのうたが伝承されている場合はそれを記録する。

武鳴県において、個人を対象に方塊字、漢字の識字の有無および教育程度を確認し、Scribner and Cole(1981)の行った心理学的な調査のなかから複数の項目について調査を行う。

(3)考察 (1)の資料および(2)で得たフォンの資料を、(2)で得られたフォンの歌い手の情報(方塊字、漢字の識字の有無および学校教育の有無、操作的な思考に関する状況)や(1)からの抽出資料にうたい手および聴き手が下した評価に関連させて分析をし、武鳴県の壮族のフォンの修辞表現の相違点が、方塊字の識字の有無に関連しているかを考察する。

4. 研究成果

(1)収集済みの資料の整理 広西壮族自治区武鳴県他において過去に収集し、ノートに記述した(現代壮文(アルファベット式記述)、方塊字、漢字による記述)6000首の掛のフォンのうち、1500首についてデジタルデータ化が完了した。

方塊(壮)字は1000字程度がCJK統合漢字拡張Fに収録されているが、1万字以上存在するとされる文字の多くはデジタル化されていない。今回は広西大学の開発したIMEを使用して方塊字を入力した。故に文字データとしての互換性には問題がある。また4冊分のノートについては歌唱時の映像についてもMP4のデジタルデータを作成した。

(2)フィールドワーク 平成30年度に中華人民共和国広西壮族自治区武鳴県にてフィールドワークを実施した。

(1)の資料に記載されたフォンの歌い手のうち約10名について、方塊字および漢字の識字状況について確認することができた。併せてこの10名についてScribner and Cole(1981)の行った心理学的な調査のなかの複数の項目について確認をおこなった。

これらの10名のうち、男性の歌い手は全員方塊字を読み書きすることができ、また漢字についても読み書きすることができた。これらの男性は全員がレベルは異なるものの初等教育を受けていた。女性の歌い手については、学校教育を受けなかった年齢層は方塊字および漢字を読み書きすることができなかった。学校教育を受けた年齢層では方塊字漢字ともに読み書きをすることができた。方塊字は漢字の造字法に倣って作字されていること、形声字の作成に当たって漢字あるいは漢字の一部をその構成要素として用いることから、漢字の知識が方塊字の習得に有利であることがわかった。現在の老人層の1世代前の男性には、学校教育を受けていないため漢字の読み書きはできないが、自学で方塊字を読み書きできる人が少なからずいたということであった。

またうた上手として評価の高かった男女各2名からライフヒストリーを聞き書きするとともにうたをうたってもらい、その映像資料を作成した。

(3)考察 武鳴県のフォンには詩型としては五言四句のものや五言十二句のものがある。基本は男性と女性の間でフォンを交換する掛け合い歌である。男性と女性がそれぞれ同性同士で2人で1組を作り4人で(2人×2人)でうたの掛け合いをする。また4人の同性が2人で1組の組を作りさらにこの2組(頭組と脚組という)が連合して同性グループを作り、同様にグループを作った異性グループとの間でうたの掛け合いをする場合もある。

武鳴県の掛け合い歌には比喩歌というジャンルがある。地域のうた上手とされる人はみな比喩歌のうたい手である。比喩歌には中国文学で言うところの「興(先物と感興から構成される)」という様式で表現する場合と歌い手が自分自身で歌の構造を作っていく場合がある。

4人1グループが五言十二句を「興」の様式でうたう場合、頭組が と かなる先物と と かなる感興を作りうたう、次に脚組が と かなる先物をうたい続いて頭組が と かなる先物をうたう。さらに脚組が と かなる感興をうたい続いて頭組が と かなる感興を作りうたう。この場合フォンは 先物 感興、 先物、 感興という構造が自動的に出来上がる。「興」のうたでは、うたい手が識字者であるか非識字者であるかを問わず、うたの内容が破綻することはない。

一方4人1グループが五言十二句のフォンをうたい手が自分自身で詩の構造を作っていく場合、頭組が を脚組が を作ることに変わりがないが、脚組は を取り込むことを前提として を、 を取り込むことを前提に を作る必要がある。識字者は頭組の作ったものを取り込むことを前提に自分の表現を作ることを失敗することはないが、非識字者は時々失敗する。

「興」の方法は自分自身でうたの構造作る方法よりもうたの作り方としてより古いものだと考えられている。この作り方では識字の有無を問わずうたを作り損ねることはない。一方うたい手が自分自身で詩の構造を作っていく作り方では、識字者はうたを作り損ねることはないが、非

識字者はうたをうまく作れない場合がある。このことから、うたい手が文字を読み書きする経験を通して、自分自身でうたの構造作るといふ新しい表現方法を獲得したと考えられる。

上記の研究成果を「壮族の掛け合いうたにおける声と文字」(『アジア遊学』254号)「声のうたと文字のうたー壮族の掛け合いうたにおける識字者と非識字者の表現の差異」(『アジア民族文化研究』20号)他の論文として発表した。

参考文献

ウォルター・J. オング、桜井直文他訳『声の文化と文字の文化』藤原書店 1991年(Walter J. Ong, Orality and literacy, Methuen, 1982)

西田龍雄他『言語学を学ぶ人のために』世界思想社 1986年

Scribner Sylvia and Cole Michael, The psychology of literacy. Harvard University Press, 1981

Collins, Allan; And Other, Cognitive Apprenticeship: Teaching the Craft of Reading, Writing, and Mathematics, University of Illinois. 1987

John Miles Foley, The Theory of Oral Composition Indiana Univ Press, 1988

Ruth Finnegan, Literacy and Orality Iulu.com 2014 (1986)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 手塚恵子	4. 巻 62
2. 論文標題 公共財としてのうたー中国壮族の掛け合い歌における弾圧と賞賛の歴史から	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本歌謡研究	6. 最初と最後の頁 45 - 54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 手塚恵子	4. 巻 20
2. 論文標題 私の相互唱（歌の掛け合い）研究	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 比較日本文化研究	6. 最初と最後の頁 72-85
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 手塚恵子	4. 巻 254
2. 論文標題 壮族の掛け合いうたにおける声と文字	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 アジア遊学	6. 最初と最後の頁 117 - 129
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 手塚恵子	4. 巻 20
2. 論文標題 声のうたと文字のうたー壮族の掛け合いうたにおける識字者而非識字者の表現の差異	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 アジア民族文化研究	6. 最初と最後の頁 45 - 62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 手塚恵子	4. 巻 14号2巻
2. 論文標題 山と書くな 壮族の古壮字と日本の訓仮名をめぐって	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 社会イノベーション研究	6. 最初と最後の頁 107 117
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 手塚恵子
2. 発表標題 公共財としてのうた
3. 学会等名 日本歌謡学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 手塚恵子
2. 発表標題 声のうたと文字のうた
3. 学会等名 アジア民族文化学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 手塚恵子
2. 発表標題 歌垣 (掛け合い歌) 研究の現在 The Present State of the Study of Reciprocal Singing "Utagaki"
3. 学会等名 日本音楽知覚認知学会春季大会 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 手塚恵子
2. 発表標題 書き言葉を捨てるー中国壮族の新旧の書き言葉の過去と現在
3. 学会等名 日本文化人類学会第53回研究大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 山田直巳 編著	4. 発行年 2021年
2. 出版社 新典社	5. 総ページ数 541
3. 書名 歌・呪術・儀礼の東アジア	

1. 著者名 江口 一久 , 八木 祐子 , 手塚 恵子 他	4. 発行年 2021年
2. 出版社 風響社	5. 総ページ数 400
3. 書名 儀礼と口頭伝承	

1. 著者名 橋弘文、手塚恵子他	4. 発行年 2018年
2. 出版社 せりか書房	5. 総ページ数 297
3. 書名 文化を映す鏡を磨く	

〔産業財産権〕

〔その他〕

口承文芸 掛け合い歌DB
<https://sam-nied-sam.com/>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------